学習課題の例	主な活動	指導プログラム 関連ページ	関連する教科等の学習指導要領	副読本の記載
				P18「場所請負制成立」　P18～19「クナシリ・メナシの戦い」 P19「幕末の蝦夷地」

商品経済と貨幣経済の拡大
江戸時代中期以降、自給自足の経済は崩れ、貨幣によって商品を売り買いする経済となった。この貨幣経済は都市だけでなく農村にも浸透し、農民は綿・茶・たばこなどの商品作物を作って売り、そのお金で農具や肥料などを買うようになった。その結果、農村では商業にたずさわって富を蓄える農民と貧しい農民とに分かれて貧富の差が広がっていった。また、幕府や藩は出費が増え、財政が悪化した。
この頃、蝦夷地のニシンは煮て油を絞り、乾燥させたあと、粉末状の肥料に加工され、大量に取引された。アイヌの人たちとの交易だけではニシンの需要を満たすことができないため、商人たちは和人の漁夫を使って漁業経営に乗り出した。さらに、アイヌの人たちを漁業労働者として強制的に働かせた。イリコ（ナマコをゆでて干したもの）・干しアワビ・コンブなどは俵に詰められ、長崎から盛んに中国に輸出された。

写真Ⅲ－4：ツキノエ

場所請負制成立　18世紀にはいると**商品経済と貨幣経済**の拡大によって消費が増え、松前藩の家臣は商人から借金をするようになった。そのため、商人はあらかじめ松前藩やその家臣に運上金（農業以外の営業に課した税）を納めて、アイヌの人たちとの交易を引き受けるようになった。こうした仕組みを場所請負制という。

商人たちは、はじめはアイヌの人たちからニシンやサケなどを買い集めていた。しかし、本州において藍や綿花などの商品作物の栽培が盛んになったことによって、肥料としてのニシンの需要が高まったことや、長崎貿易において海産物の輸出が増えたことから、アイヌの人たちを働かせて漁獲量を増やし、もうけを大きくしようとするようになった。

それまで、生産者・交易者であったアイヌの人たちは、漁場の働き手としてかり出され、狩猟や漁労、交易など、アイヌ本来の生活をすることが困難になった地域が和人地の周辺で見られるようになった。

クナシリ・メナシの戦い　18世紀の中ごろには、和人の活動がサハリンや千島にも及ぶようになった。また、**ラクスマンが根室に来航し日本との貿易を求める**など、ロシアは活発に、カムチャツカ半島を南下してその勢力範囲を広げようとしていた。しかし、択捉島など蝦夷地の東端には、強い力を持ったアイヌの指導者たちがおり、松前藩やロシアの勢力の及ばない地域が存在していた。

国後島の指導者**ツキノエ**は、和人の商人との交易を何年もの間、断り続けていたが、やがて交易を開始し、松前藩との関係を持つようになった。ロシアが蝦夷地に接近し、それに対応して幕府がこの地域に強い関心を寄せるようになったからである。

松前藩や家臣たちは、徐々に商人に運上金の増額を求めるようになっていった。そのため、商人たちはアイヌの人たちを無理に働かせてもうけようとした。アイヌの人たちをおどしたり、殴りつけたり、妻を奪ったりする和人もいた。

1789年、国後島とその対岸でアイヌの人たちが立ち上がり、ひどい振る舞いをしていた和人たち71人を殺害した。「クナシリ・メナシの戦い」である。ツキノエたちは、立ち上がったアイヌの人たちを説得して、松前藩と話し合いをしようとしたが、松前藩は強硬な態度でのぞみ、すぐさま戦いの指導者たち37人を処刑してしまった。この戦いによって松前藩は国後島や道東のアイヌの人たちを制圧し、その支配下に組み込んだ。この戦いはアイヌの人たちの最後の戦いとなるのである。

日本と貿易を求めるロシアの動き
1770年　ウルップに渡航してラッコ猟をはじめたロシア人は、同じくラッコ猟で活動していたエトロフアイヌを迫害し長老の殺害に及んだ。翌年、エトロフアイヌたちは、ロシア人を襲撃し、20人ほどを殺害し、生き残りのロシア人はウルップ島からにげ去った。
1792年　漂流した日本人の送還を名目に、ラクスマンがロシア最初の派遣使節として根室に来航し、国交を要求した。翌年、函館に来航し、幕府に通商を要求したが断られた。
1804年　長崎に来てレザノフが通商を求めたが、幕府は鎖国を理由に断った。レザノフは帰途、その報復としてサハリン（樺太）・択捉島の番所や漁船を攻撃した。

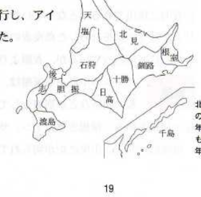
18

幕末の蝦夷地　クナシリ・メナシの戦いの後、蝦夷地の太平洋側、続いて日本海側も幕府の直轄地とされた。幕府はアイヌの人たちと直接交易をしようとしたり、アイヌの風俗を和人化しようとした。ロシアなどの外国に対して、蝦夷地が幕府の支配下にあることを示すことを重視したからである。しかし、財政上の問題やアイヌの人たちの強い不満もあって、幕府の政策はうまくいかず、結局それまでと同じように商人に頼ることになった。

その後、蝦夷地は松前藩に返されたが、欧米諸国と和親条約を結ぶなど幕末に外国からの圧力が高まると、幕府は再び蝦夷地を直轄地とした。これによって、蝦夷地の奥地にまで入る和人は以前よりも多くなり、漁業の規模も拡大し、アイヌの人たちに対する振る舞いもひどくなる一方であった。和人と接触する機会が増えるにつれ、それまでアイヌの人たちの生活にはなかった天然痘などの病気が流行し、アイヌの人たちの**人口は激減**した。

表Ⅲ－1：アイヌの人口が減ったところ

	1804年	1854年
後志	2,871人	1,577人
石狩・天塩	3,120人	1,613人
釧路	2,138人	1,515人
根室	1,370人	581人
千島	1,765人	602人



北海道開拓使は、北海道、南千島を11国の区域に分けた。この表は1804年と1854年の人口調査を後世の11国に当てはめたもので、北海道庁『北海道旧土人』（1911年）から引用したもの。

失われた千島アイヌの民族文化
アイヌ民族は、北海道やサハリン以外にも住んでいたことを知っているだろうか。それは千島列島の北部・中部で生活していた、千島アイヌ（クリルアイヌ）と呼ばれる人たちである。現在彼らの文化を受けつぐ人はもういないとされ、その歴史や文化は謎に包まれている。
彼らがいつごろから千島列島で生活していたのかは、まだわかっていない。考古学の調査により、少なくとも17世紀の中ごろまでには、千島列島で彼らの生活が営まれるようになっていたことがわかっており、1697年に千島列島へ遠征したロシア人の記録にも彼らが登場する。彼らは北海道やサハリンのアイヌと共通の言語や習慣を持ちながらも、土に覆われた半地下式の家屋に居住したり、海鳥の毛皮で作られた衣服を着用したりするなど、風が強く冷涼な千島列島の風土に適応した独自の文化を持っていた。
しかし18世紀になると、当時は貴重品であったラッコの毛皮を求めてロシア人が千島列島に進出し、その支配を受けた千島アイヌの生活文化はロシア化した。また、1875年の樺太・千島交換条約で千島列島が日本領になると、千島アイヌはより北海道に近い色丹島へと強制的に移住させられ、明治政府による同化政策が実施された。その後、慣れない生活習慣や免疫のない病気にさらされたために、つぎつぎと文化の担い手を失い、彼らの独自の文化は急速に失われた。第2次世界大戦の直後には、千島アイヌの文化はわずかながら伝承されていたが、20世紀後半には失われてしまった。

19

Ⅳ　近世（17～19世紀）の文化
P20「生業」
P21「『オムシャ図』に見るアイヌ文化」

Ⅳ　近世(17～19世紀)の文化

カムイ
「カムイ」というアイヌ語は、日本語で「神」と訳されることが多い。しかし、「カムイ」という言葉の意味は、日本語の「神」や「仏」などと重なる部分もあるが、「アイヌ＝人間」に対しての「カムイ」という意味もあり、全く同じというわけではない。

写真Ⅳ－1：穴グマ狩りの様子

写真Ⅳ－2：チェブケリ（鮭皮靴）

写真Ⅳ－3：復元されたチセ（家）

生業　アイヌ民族は、狩猟、漁労、採集を中心として、これに補助的な農業を行っていた。アイヌ民族は自然の中にある多くのものを、「カムイ（神）」が姿をかえて人間の世界にいるものだと考え敬った。動物の神から毛皮や肉を受け取り、お礼の言葉とお土産を持たせて神の世界に送り帰すと、その神はふたたび動物の姿になって人間の世界にやってくると考えていたのである。その代表的なものがクマのイオマンテである。これは、春のクマ猟で捕獲した子グマを1年から2年ほど飼育して神の世界に送るという飼いグマの送り儀礼である。アイヌの人たちは自然を大切にし、必要以上のものをとらないなど、自然とともに生きる暮らしをしていたのである。

アイヌの人たちは少人数で穴グマ狩りを行った。春先の堅雪のころに山へ入り、巣穴で冬眠中のクマを捕えるのである。穴グマ狩りは、クマを捕らえることのできる確実な狩猟法であった。巣穴は別なクマに何度も使われる可能性が高いことから、その場所は占有的に使用できるとされ、世襲されることもあった。クマはこのほか、仕掛け弓によっても捕獲された。クマのほか、シカやワシ、キツネやテン、カワウソなど、海ではラッコやオットセイ、アザラシ、トドなどが猟の対象となった。

漁労では、川を遡上するサケ、マス、シシャモなどのほか、ウグイやイトウ、アメマス、海上ではマグロやメカジキ、マンボウやウミガメなどが対象となった。とりわけサケ漁は重視された。特に、産卵場での漁は大切にされ、コタン（集落）や家族が占有的に使用できる場となっていた。アムール川の下流域とサハリンではサケ皮をなめした魚皮衣の製作が盛んであり、アイヌの人たちにも伝わっているが、衣服よりも履物に多く利用された。

家屋　コタンの中にある家屋は、母屋のほかに倉、子グマの檻、便所などが別棟として伴っていた。家は掘っ立て柱で屋根を組み、屋根と壁はアシ、ササ、樹皮などで葺いた。

母屋は一間で、中央に炉が切られている。入り口の正面に神窓があり、右手の壁には大小の窓が切られ、左手奥の壁際には宝物置場がしつらえられた。炉の周りは家族が生活するための場所であり、時には神々や来客を迎える大事な場でもあった。したがって、その空間の利用には厳しい決まりが定められていた。入口から見て炉の左側が主人夫婦の座るところで、右側が家族の座るところであった。炉の奥で神窓に面したところが大事な客が座る上座であった。上座はまた、数々の儀礼を催す場でもあったので、神聖な空間として普段でも立ち入ることは慎んでいた。炉はまた、アイヌの人たちが崇拝する火の神がいるところでもあるので、火や灰を含めて非礼のないように日頃から心がけていた。火の神と夫婦神とされるのが家の神で、宝物置場の隅に祀られていた。

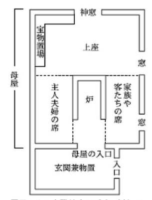
20

倉は高床式で、ネズミ返しを持っていた。**高床式の倉**は近世の日本列島では、琉球文化圏とアイヌ文化圏においてのみ見られる。子グマを飼育するための檻を敷地内に持つのもアイヌ文化の大きな特色である。

『オムシャ図』に見るアイヌ文化　オムシャとは、交易の儀礼であった。本来は一年に一度、交易のために訪れる和人との親しい交歓儀礼であったと考えられるが、幕藩体制の完成が蝦夷地に及び、松前藩が成立したのと同時に制度化されていったものである。このような儀礼を利用して、アイヌの人たちへの支配が強められ、その支配が示されるものとなった。

場所請負制が進むと、和人はアイヌの人たちを漁場の近くに集めた。そして、和人はアイヌの人たちの中から「役蝦夷」と呼ばれる人を任命して、役蝦夷に命令してアイヌの人たちを働かせた。

『オムシャ図』に描かれた役蝦夷たちは、アイヌ文化には本来ない土下座で挨拶をさせられている。漆塗りの入れ物の中には酒が、その上にはタバコが置かれているが、いずれも和人側からアイヌ側に「下される」ものであった。アイヌの人たちと和人が対等であったころには相互の信頼関係に基づいて交易が行われ、交易品の評価も厳正であったはずである。和人を友人に持つことで、アイヌの人たちはアイヌ文化にはないものを手に入れることができたのである。特に美しい日本の漆器は富の象徴であったが、やがて漆器は粗悪なものへと変化していった。



図Ⅳ－1：十勝地方のチセ（家）の内部

写真Ⅳ－4：プ（倉）
アイヌ文化圏の高床式倉庫

写真Ⅳ－5：高倉
琉球文化圏の高床式倉庫

写真Ⅳ－6：『オムシャ図』

21